

名古屋地学会第 312 回例会報告

横井大作

日時： 平成 27 年 (2015 年) 12 月 25 日 (金) 10:00~16:00

集合場所：名鉄御嵩駅

内容： [午前] 役場の方の案内による亜炭廃坑調査口見学

[昼食] 道の駅可児ッテ

[午後] 御嵩町上恵土の褐炭層の観察および植物化石採集 (中村層), 可児市土田の鬼ヶ島で火山角礫岩および珪化木の観察 (蜂屋層)

参加者： 大谷順子, 近藤 洋, 諏訪 斎, 滝川正子, 田島一成, 田辺元祥, 戸倉則正, 長尾正巳, 中根鉄信, 松尾晋太郎, 松岡敬二, 村松憲一, 森 裕子 (13 名)

案内者： 横井大作 (愛知県立熱田高等学校)

鍵谷和宏氏, 井澤明好氏, 板屋達彦氏 (いずれも御嵩町役場亜炭鉱廃坑対策室)

1. 亜炭鉱廃坑調査口見学 (御嵩町洞公民館西)

御嵩の亜炭^{*}は、明治 2 年、町民が旅の帰りに大阪から燃える黒い石を持ち帰ったところ、似たような石が裏山にあったため掘り出したのが始まりとされる。主に工場のボイラーの燃料として石炭の代わりに利用され、この地方の繊維産業や陶磁器産業を支えた。昭和に入り、戦時下では軍需工場の燃料確保のため生産が強化されたが、昭和 30 年代には石油に押されるようになった。さらに、無計画な採掘によって落盤事故が相次いだ。昭和 42 年に御嵩町内の亜炭鉱はすべて閉山になった (『御嵩の亜炭産業史』より)。

当日は、井澤氏が連絡員として坑外で待機し、全員がヘルメットを着用の上、板屋氏に坑内を案内していただいた。坑内は意外に天井が高く (一番高いところで約 5m)、普通に立って歩くことができた。足元にはトロツクのレールの跡があった。亜炭層は瑞浪層群中村層 (中新世前期) の中にあり、坑内は主要稼行炭層だけに足元から天井まで亜炭だった。鉱山では一般に、坑道を保持するために木材をつかって天井面や壁面を支えるが、ここではその方法ではなく、亜炭層を柱状に残して掘り進める「残柱方式」がとられた。御嵩町の亜炭は地表面下 5m という非常に浅いところにあり採掘が容易であったが、残柱が長年の間に劣化し、陥没をまねく原因になった。実際に、坑内には陥没している箇所があった。

* 亜炭：行政で使われる用語で、学術上は褐炭。



写真 1 調査口



写真 2 坑内



写真 3 参加者 (役場前にて)

2. 褐炭層の露頭観察（御嵩町上恵土新町，木曾川左岸の段丘崖）

砂泥互層に挟まれている褐炭層を観察した。また，砂泥互層中にはクロスラミナが見られた。曾我部ほか（1967）によれば，可児地区御嵩地域の主要稼行炭層の上位には白色の凝灰質頁岩が存在し，土岐地区との対比において鍵層になっている。この露頭の上位には，目立った白色の地層が見られるため，これが凝灰質頁岩であるとすれば，坑内で見た厚い褐炭層はこの露頭の下位になる。



写真4 褐炭層



写真5 砂泥互層中のクロスラミナ

3. 火山角礫岩および珪化木の観察（可児市土田，鬼ヶ島）

可児川のなかでもこの中洲一帯は奇岩が多く，犬山桃太郎伝説で桃太郎が鬼を退治した「鬼ヶ島」と言い伝えられている（可児市観光協会）。ここでは瑞浪層群蜂屋層の安山岩質の火山角礫岩と珪化木を観察した。2010年7月の大雨による可児川の氾濫現場でもある。

文 献：

曾我部正敏・鈴木泰輔・井上英二（1967）美濃炭田土岐・可児両地区の各主要稼行亜炭層対比について（予報），地質調査所月報，18(3)，55-60.



写真6 鬼ヶ島



写真7 火山角礫岩



写真8 珪化木